

「美術」の授業

毎年、中高一貫の県立宇土中で11月に開催されるペーパーブリッジコンテスト。(一社)ツタワルドボクや熊本大学・九州大学の専門家が講師となり、3年生10人のチームで紙の橋を制作。設計、制作、発表までが「美術」の授業で行われ、デザインはもちろんのこと、強靱さやコスト面までも競う。この産・学・官が連携する教科横断型の授業は、美術教諭森内さん

んの考案。昨年から八代中、今年は玉名中でも予定され、新たな「美術」の可能性が広がっている。

「美術」の根源

森内さんが芸術に目覚めたのは高校2年生。男性の小便器にサインをしたマルセル・デュシャン作『泉』との出会い。「これが芸術なのか」。森内少年のそれまで良しとしてきた価値観がひっくり返った。「見えないものに手触り感を導き出したい」という新たな意識

の芽生え。今では、教員の傍ら、不知火美術館でのワークショップをはじめ、各地でインスタレーション(設置芸術)やオブジェなどを用い、個展を開催している。都市の文化とは無縁に育った森内さんにとって、発想の根源はいつも自然。故郷のにおい、空気感など実際の記憶が、一見抽象的な作品の中に昇華される。

大学時代にさまざまな表現素材の研究に取り組んだ森内さん。最近では身の回りの素材から生徒たち

森内 和久 Moriuchi Kazuhisa

三角町在住。人吉市出身。人吉高校で美術と出会い、九州産業大学芸術学部美術学科に進学。卒業後は帰郷し、県立高校で美術教員に。3月に定年退職後も、再任用として同校に勤務。各地で個展も開催。現在、不知火美術館運営協議会委員の会長を務める。

銅線と和紙でほおずきを模し、無常感をテーマに彼岸と此岸の境界に意を馳せた作品



「海とほおずき」(2000)



不知火美術館のワークショップで講師も



授業ではいつもフレンドリーな森内さん



細かく計算し設計されたオリジナルの橋



重りを積んで橋の強靱さを競う

森内さんと指導する宇土中・高の美術部員の皆さん

子どもたちは「美術」で未来の自分を描く

の楽しそうな顔にまで発想が飛ぶ。「これをこう使ったらきつと面白い授業ができる——」。

「美術」の学び

「美術」の「表現」の領域では、絵画や彫刻、映像メディアなど多様な題材を、教員は指導の目的に応じて授業を組み立てる。森内さんの授業では、文房具のプレゼンもその一つ。商品の魅力を伝えるための資料として、テレビショッピングも教材となる。

ペーパーブリッジコンテスト構想は10年以上前から。その想いが

知り合いの熊大教授を伝い、(一社)ツタワルドボクへとつながり、6年前、ついに実現にこぎ着けた。大会では、一人一人が社長、専務、社員としてチームの中で役割を担い、物理や数学など多様な知識を用いる。近年、高等教育で求められる科学・技術・工学・芸術・数学の5つの学問を組み合わせたSTEAM教育をまさに体現した授業。受験のための勉強となりがちな各教科を、社会で必要なスキルに結び付ける場だ。

「美術は、経験値や知識をいろんな引き出しから取り出し、接着

剤のようにくつつけながら形にしていく学問。だから文系・理系を問わず芸術の学びを体験させてい。」と森内さんは話す。

コンテストで優勝した2班社長の今井萌絵さんは「未来のことを学べる授業。美術を通して人間性も成長できたと思います。みんなが声を掛けてくれて、チームを信じたことで、真に協力することを学びました。」と語る。

大会で得る学びも生徒によってさまざま。森内さんの想いは、未来を自分の手で描く子どもたちの生きる力となる。